

生徒の知的発達に相応しい英語力がつく指導法

—CLILの手法を用いた授業と文法、語彙指導の必要性—

佐藤 留美

要旨

「Active Learning で学ぶ英語の授業」、「Communicative な英語力をつける授業」を多くの教師が実践している。しかし、子どもたちは、学年が上がるにつれて、英語に興味を失くしていくように見える。それは音声活動を重視するあまり、授業自体がルーティーン化してしまっているからではないか。ここでは、CLILの手法を用い、文法指導や語彙指導にも重点を置き、生徒の知的発達に相応しい英語力を養う指導法を提案したい。

1. はじめに

「英語指導は英語で」という意識が教師の間に定着し、生徒を中心に据えたコミュニケーション重視の授業が行われるようになってきた。小学校3、4年生では生徒も大きな声で反応し楽しく学習している。しかし、学年が進むにつれて、生徒の反応は少し異なってくる。英語学習がルーティーン化してしまい、生徒は授業で知的刺激を得られないからではないか。つまり、知的に成長した彼らに相応しい英語力がつく授業になっていないからだと思われる。

その一因として文法事項が全く教えられていないということがあげられる。外国語の習得は、母語習得とは異なる。言語の規則を学ぶことは言語習得には非常に有効であるというのは我々も周知のことで、外国語を学ぶ小学生にとっても同じである。「なぜ」、「どうして」を知っていれば、自ら考え応用することができる。そして、自ら気づき学んだことは忘れない。定着する。ルーティーンの授業から脱却し、生徒の自学力を引き出し、生徒が自由に自己表現できる英語力を身につけられる授業を提案したい。

2. 現在の英語指導の問題点

初期学習者に対する授業の多くは、英語の母語話者の言語習得の過程を踏襲している。例文を提示し、パターンプラクティスを繰り返して理解させ、習得させる。いつの間にか英語の仕組みを理解し、ある程度のことは英語で表現できるようにさせる。しかし、生徒は、あくまでも「ある程度のことを表現できる」力しかつかない。こういった授業の課題を新指導要領では以下のように指摘している。

2.1 新指導要領で指摘された課題

- ・ 音声活動中心で学んだことが中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に継続され

ていない。

- ・ 日本語と英語の音声の違い、英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。
- ・ 高学年は児童の抽象的な思考力が高まる段階で、より体系的な学習が求められる。
- ・ 学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じる。学校種間の接続が不十分。学習内容や指導方法等を発展的に生かしていない。

つまり、『聞くこと』、『話すこと』を中心とした活動を通し、外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高め」たうえで、「発達段階に応じ、段階的に文字を『読むこと』、『書くこと』を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行い」、「中学校への接続を図ることを重視する」ように、ということが課題として指摘されたということである。

日本では学校の教室以外では英語に触れる機会がほとんどない。欧米のように、日常的に英語やその他の言語に接する機会があれば、母語学習者と同じような習得方法でもよいかもしれない。しかし、日本ではそういった方法では「ある程度の英語力」しかつかないということである。興味関心から学習し始めた言語をレベルアップさせるためには、「なんとなく」規則を当てはめて理解するよりも、しっかりとした規則を学び、その土台をもとにさらに高度な英語力を積み上げていくことが効率的で理にかなっている。そのために、中学校では次のような授業を提案したい。

1年次には、英語に慣れさせるために英語のみで授業を行う。2年次からは1時間、文法を日本語で教える。文法の授業は、ノートやプリントを使用し、問題を解かせ、書かせて定着を図る。理屈を教えることにより、応用が利くようになる。この時間は英文和訳の授業ではない。言語を使用するための基礎力を養う授業である。日頃、音で理解している単語を文字として認識し、音と文字の確認作業をする授業である。中学校の授業を、日本語での文法学習の授業と教科書の英語素材を使って英語で英語を習得する授業の両輪とすることで学習者の英語力を伸ばしていくことができる。

2.2 音声とデジタル教材中心の授業の弊害

多くの教科書にはデジタル教材が用意されている。特に中学校ではそれを活用して授業する指導者が多い。提示される本文と音声の流れ生徒はそれを見ながら音読をする。しかし、教室では後ろの席の生徒は前の生徒の陰になってスクリーンが見えなかったり、スクリーンに映される文字そのものが小さく見えなかったりと、多くの生徒は結局、音だけを頼りに音声をリピートすることになる。そういった授業では以下の弊害が生まれる。

- ・ were、white 等、音声を聞いてリピートできるが、書かれている文字を見ただけでは読めない。
- ・ be 動詞と一般動詞が常に一緒になって使われる。
- ・ Listen & Repeat 中心の授業は repeat する内容を吟味し、自分の意見を述べる機会が少なくなりがちで、自己の意見を構築する訓練ができにくい。

ここで 2019 年度の全国学力調査の問題から、その弊害を考察してみたい。

9

(1) 次の①, ②について, () 内に入れるのに最も適切な語を, それぞれ 1 から 4 までの中から 1 つ選びなさい。

① Let's play tennis tomorrow () it's sunny.

1 and 2 if 3 but 4 or

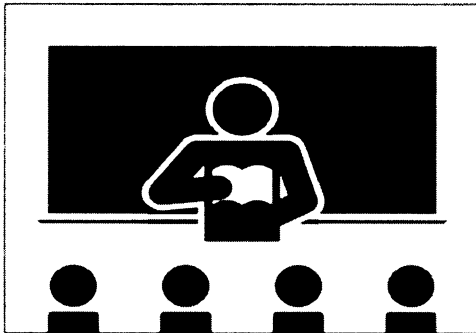
② I saw a friend of mine at the station, () I had no time to talk to him.

1 if 2 or 3 but 4 because

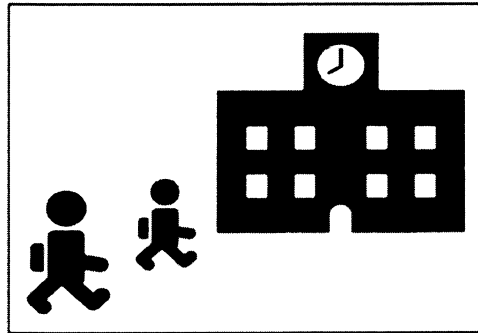
10

海外のある町が, 外国人旅行者にも分かりやすいタウン・ガイドを作成するために, 「学校」を表す2つのピクトグラム(案内用図記号)のうち, どちらがよいかウェブサイトで意見を募集しています。どちらかの案を選び, 2つの案について触れながら, あなたの考えを理由とともに25語以上の英語で書きなさい。

【 A 】



【 B 】



※ 短縮形 (I'm や don't など) は 1 語と数え, 符号 (, や ? など) は語数に含めません。

(例) No, I'm not. 【3語】

解答例【Aの場合】

I think A is better. It shows a teacher and students in a classroom, so it looks like a school. I don't think B is good because it looks like a library.

全国学力調査で出題された英語の「話す」問題から

会話を聞いて即興で質問できるかをみる

あなたは、ユイコとアラン先生と話しています。まず、ユイコとアラン先生が、2人で話している場面から始まります。そのあと、あなたが尋ねられたら、2人のやり取りの内容を踏まえて、会話が続いていくように英語で応じてください。解答時間は20秒です。それでは始めます。



A: Look at this picture of my family.

A: This is my favorite picture.

Y: Nice! Who is she?

A: Oh, she is my mother, Nancy.
And he is my brother, Tom. He
can cook very well.

Y: I see. What kind of work does your mother do?

A: She is a teacher.

A: Do you have any other questions about them?

正答例

What kind of food does your brother cook?

この学力調査では「考えの過程」、「説明力」を問う問題が出題されたが、その結果は「中一で学習する」基礎英語の正答が3割で、多くの英語教師を驚かせた。たとえば、9の②の問題は「駅で友人に会った」と「彼に話しかける時間がなかった」の2つの文の意味を考えた上で、適切な接続詞を4つの選択肢から選ぶ内容であったが、59.2%の生徒が正答の「but（しかし）」を選んだ一方、「because（なぜなら）」とした生徒も35.1%に達する結果となった。文章を論理的にとらえる基礎的な力がないということだが、単純に接続詞の使い方を学んでいない、学習していないとも言える。

また、自分の意見を25語以上で述べる問10は、最も正答率が低く、完全正答率は0.1%

で、文法などに重大な誤りがない正答も 1.8%しかなかったということだが、基礎力がなければ当然の結果と言える。パソコンを使用した「話す」テストの平均正答率は 30.8%であった。先生と生徒のやりとりをふまえ、即興で質問する問題は、更に低い 10.5%であったが、前述した通り、「Listen & Repeat 中心の授業は repeat する内容を吟味し、自分の意見を述べる機会が少なくなりがちで、自己の意見を構築する訓練ができにくい」ということの当然の結果だと言える。

全国学力テストの結果が示す基礎英語の定着率が 3 割ということは、今一度英語の授業の在り方を見直す必要があるということであろう。朝日新聞では『『聞く・読む』に比べ『書く・話す』に課題があることが明らかになった。『発信力をつける』授業を」と述べられているが、「発信力」以前に基礎力をつけることが急務だということである。「接続詞」の用法でつまづいている生徒に、しっかりと語彙・語法の基礎力をつけ、日常で使える英語力を定着させることが最優先課題であることを示した試験結果だったといえよう。

3. 語彙・語法を定着させ、思考力・発信力をつける授業

学力調査結果で明らかになった課題をどう解決すればよいのか。音声重視のデジタル教材を活用した音読、リピートを中心にした授業をどう改善すればよいのか。

単語を口頭でリピートするだけでは語の定着は難しい。また、パワーポイントを使用した授業は画面が次々と変わり、生徒がメモを取ろうにも追いつかないことが多い。授業後には授業内容を全く覚えていないと訴える生徒も多い。英語の授業は教科書の英文を実際の場面でも使えるようにするのが最終的な目標ではあるが、その目標に向かい、ひたすらリピートし覚えさせても、それを応用し自分の意見を述べることはできない。英語の教材を素材にして、それについて批判的に読み、自分の意見を述べる訓練を行わないと発信できる英語力は身につかない。

また、教師が英語で授業をしても生徒が自分の頭で考えるような授業をしないと真の Active Learning ではない。音声から文字へ、文字から文へ、文から文章へと自己表現ができるために必要なのが語彙語法の知識である。また、文章から作者や話者の考えを理解し、それを批判的にとらえ、自らの意見を構築するためには語彙、語法を知らないと思いは発信できない。

語彙、語法の基礎力をつけ、初級学習者から脱却する授業を行うには、生徒の知的好奇心を喚起する素材で、多方面の分野へ関心を広げ、知識を深め、自己の意見を形成できるような授業を工夫することであろう。「話せばいい」というが「何を」話すのであろうか。「話せる」ようになる授業では将来社会に出てから使える英語力の基礎はつかない。ではどういった授業を行う必要があるのだろうか。以下に試みを示す。

3.1 投入教材を活用した授業例

以下の 3 点に留意して教材を選び、英語学習期間が長くなっても興味関心の持てる授業が展開できると考える。

- ・ 記憶に残りやすいストーリー性のあるものを素材に選ぶ。
- ・ 子どもの心情を問うもの、子どもの心情に訴えるものを扱った素材を選ぶ。
- ・ 意見は日本語でも自らの思考を鍛えることになるので日本語で表現することも可である。

「おもしろい、主体的に学ぶ」仕掛けは①記憶に残りやすいストーリー性のあるものを題材に選び、②生徒自らが自分で考える余地のある授業を行い、③授業内で「書かせ」、「話させ」、「エンディングを推測させる」と生徒は飽きず授業を楽しみにするようになる。以下に実際の授業を紹介する。

3.1.1 Pixar 動画 を使った授業

ピクサーの動画は 6 分程度のアニメーションである。音響効果は使われているが、登場人物は意味のわかるセリフを発しない。動画を生徒一人一人の感性で英語で書いてまとめる授業である。授業手順は以下の通りである。

1. 動画を見る。
2. 動画の内容についてグループ内で話し合う。
3. クラス全体で動画の内容を話し合う。
4. ストーリーを書くために必要と思われる語彙をワークシートで学習させる。
5. 授業者の Questions に答えながら、クラス全体でストーリーを構築するヒントを得る。
6. ワークシートを使いペアになり語彙定着を図る。

授業内では 6 までを行い、課題として「次回の授業までに学習した語彙を使い、ストーリーを作成」してくるよう指示する。次回の授業で各自のストーリーをクラス内で輪読や音読をして共有し、コメントする。

3.1.2 Pixar Project

1 年の最後にお気に入りの動画に合わせてナレーションを作成し、それを吹き込むというプロジェクトである。例に挙げるのは“Lifted”の動画を利用したプロジェクトである。

1. 各自のストーリーを持ち寄りナレーションを作成する。
2. ナレーションのパートを決め音読練習をする。
3. iPad を使い録音する。
4. 得意な生徒が動画と一緒に編集する。

今までに利用した動画は“Bao”, “Kitbull”, “La Luna”, “Lifted”, “Pip”などがある。次のページに示したのは動画“Bao”で使用した語彙ワークシート(一部)と生徒のサマリー(一部)である。

3.1.3 BBC Learning English “6 Minute English”を使った授業

この番組は、英語が母語でない英語学習者のために BBC によって作られたものである。6 分間のラジオ番組仕立てになっていて、語彙は多少難しいものも使われているが、そういった語彙は、番組内で解説され、理解できるように工夫されている。話題も、“Improving

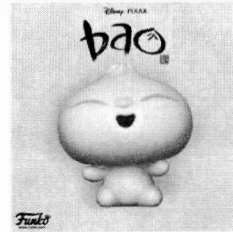
VOCABULARY WORKSHEET: "BAO"

Directions: Fill in the blanks with the correct word that matches the definition.

1		n., a kind of bread that is made by steaming wheat: often filled with meat, bean paste, or other filling
2		n., a thick mixture of flour and liquid, used for baking into bread or pastries
3		v., to become alive
4		v., to be a symbol of something, to mean something
5		n., a thing that represents something else, especially an idea

Word List

apologize	argue	childhood
come to life	dough	fiancé(e)
fragile	resemble	steamed bun



bao
SUMMARY ~

Bao is a short film made by Pixar. The story is about the bao that is a steamed bun comes to life.

The woman make a lot of steamed bun and eat with her husband but, the husband is hurry to go to work. She eat steamed bun alone but, the steamed bun come to life. She take care of the bun as a child, feed the meat go shopping together, etc. One day the bao grow up, he want to play soccer with other kids but, The woman is overprotection and its maus bao feel that he want independence. When the bao introduce his fiancé and he try to move out of the woman house, the women try to stop bao from leaving, but not effective. The woman angry. She eat the bao! after she cried over the thing she had done. She lies in bed and her real son enters the room, the whole things that happen is just a dream. The son do the same treat that his mom do with steamed bun. After they understand each other

your memory”, “Can robots care for us?”, “Why’s it called ‘mother tongue?’”などと多彩である。授業手順は以下の通りである。

1. 放送を聞く。
2. 放送された話題について確認、議論する。
3. トランスクリプトをペアで読む。
4. 読めない語彙、わからない語彙を確認する。
5. 再度放送を聞く。
6. トランスクリプトを再度ペアで読む。

このサイトには transcript もプリントアウトできるようになっており、編集も可能である。

3.1.4 BBC Learning English “6 Minute English” Project

学期中に扱った “Insomnia”, “Memory”, “Environment” のトピックを組み合わせ「子ども電話相談室」のラジオ番組をコンセプトにスクリプトを作成し、録音した。手順は以下の通りである。

1. 各自、興味あるトピックについての放送原稿を作成する。
2. 原稿をまとめ、必要な箇所は修正する。
3. 役割分担と担当箇所を決める。
4. 担当箇所を練習し録音する。
5. 得意な生徒が音声を編集する。

音響効果も入り、とてもいい出来であったので、文化祭の学年発表の教室で音源を流した。後日、授業内での録音風景の動画に録音したものを入れ込んだ授業案内の動画を作成した。学校説明会で生徒がその動画を使って、本授業の紹介を行った。記念に残るプロジェクトとなった。以下はそのスクリプトの一部である。冒頭の KGJ は Kojimachi Gakuen Joshi のことで、BBC をもじったものである。

6 Minute English from KGJ Learning English.com

R: Hello and welcome to the 6 Minute English. I’m A- .

H: And I’m K- .

R: In this KGJ program, with the help from professionals, we hope to give advice to kids who have some problems. Today we are going to talk about three interesting topics. Now let’s begin with the first one. It is insomnia.

H: What is insomnia?

R: Well, insomnia is having difficulty in sleeping.

H: So if you cannot sleep, you have insomnia.

R: Right. The girl on the phone is suffering from insomnia.

G: Hello, I’m Y- . I cannot sleep well at night these days, and I cannot concentrate on my studies in

class. Do you have any good advice for me?

R: OK, we've invited Dr. J -. Let's hear her advice.

Dr.: Hello, I'm Dr. J -. The best advice is "get out of bed when you cannot sleep."

H: Thank you for joining our program today!!

RH: Bye, everyone!

6 Minute English from KGJ Learning English.com

3.2 CLIL とは

CLIL (Content and Language Integrated Learning) とは、1994 年にヨーロッパで提唱された学習法で、非母語で科目を学ぶことにより、科目内容・語学力・思考力・協同学習という 4 つの要素をバランスよく育成できると考える教育法である。『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』に 10 の原則が次のように記されている。

1. 内容学習と語学学習の比重は 1 : 1 である。
2. 4 技能 (読む・聞く・書く・話す) をバランスよく統合して使う。
3. タスクを多く与える。
4. さまざまなレベルの思考力 (暗記、理解、応用、分析、評価、創造) を活用する。
5. 協同学習 (ペアワークやグループ活動) を重視する。
6. 異文化理解や国際問題の要素を入れる。
7. オーセンティック素材 (新聞、雑誌、ウェブサイトなど) の使用を奨励する。
8. 文字だけでなく、音声、数字、視覚 (図版や映像) による情報を与える。
9. 内容と言語の両面での足場 (学習の手助け) を用意する。
10. 学習スキルの指導を行う。

そして CLIL で授業を行う利点は次のようにあげられている。

1. 中身のある内容やオーセンティックな教材により、学習への動機づけが高まる。
2. 異文化意識が育つことで、国際社会に参加するための英語習得という「統合的動機(受験勉強のような「道具的動機」に対する概念)」が生まれる。
3. 意味のある豊かなインプットが与えられる。
4. 英語を使って学ぶので、インタラクションやアウトプットを行う必然性が生まれる。
5. 「聞く・読む・話す・書く」を有機的に統合できる。
6. 深い思考を伴うので、言語知識が記憶に定着しやすい。
7. 文字、音声、数字、視覚など多様な知能 (multiple intelligences) に訴えるので、さまざまな学習スタイルに適合しやすい。

3.2.1 CLIL の手法を用いた英語コミュニケーション I の授業

三省堂 *MY WAY I* の Lesson 9 *Sesame Street* を扱った授業の取り組み例を紹介する。9 課は子ども向けテレビ番組「セサミストリート」が世界中でどのような理念や登場人物で

放映されているかを扱った課である。英語は平易ではあるが課にはいろいろなテーマを取り上げられる種がたくさんある。

例えば、「セサミストリート」は北アイルランド、メキシコ、アメリカ、ペルー、ブラジル、インド、オランダ、エジプト、南アフリカなどの多くの国で放映されていると述べられている。これらの国々を扱えば地理の授業が可能である。例えば、1. 地図上の位置、2. 話される言語、3. 国旗、4. 気候などに触れることができる。英語が不得意な生徒でも地理が得意な生徒もあり、そういった生徒が活躍できる場にもなる。

また、“In Latin America, children can see the same program in more than 30 countries.”に着目して、“Why is it possible for children in more than 30 countries to see the same program?”と問えば、南アメリカの植民地支配の歴史を扱う授業ができる。

「セサミストリート」に取り上げられているキャラクターは多彩で、南アフリカのキャラクターKamiはHIV positiveと設定されている。Kamiを取り上げて、HIV、エイズ等の病気や途上国の医療、公衆衛生、ひいては南北問題を取り上げる授業が可能である。

しかし、CLILの手法を用いるためには、教師自身がトピックについて深い知識を持つことが必要になってくる。必然的に授業準備には多くの時間がかかることになる。また、トピックについて自分で理解したとしてもそれを生徒に英語でどう伝えるか。彼らの習得語彙に合わせた英語で授業を行うことのためにさらに準備をすることになる。

時間と手間のかかる授業準備になる。しかし、授業準備が楽しい。準備をしていると教師自身も学んでいる実感がわく。授業で扱われている素材を膨らませ、生徒の知的好奇心を刺激し、生徒の想像力を働かせる授業を組み立てると、生徒も教師も飽きずに授業に取り組める。

ある授業で、“Now, let's stop here today.”というとき、一人の生徒が「もう授業終わり？」と言ったことがある。至福の時である。そういった授業が「脳（思考力）を activate」させる、本来のActive Englishの授業なのだと思う。授業手順は以下の通りだが、授業者が事前に授業のQ&Aのスク립トを準備しているのが大前提となる。

1. 授業の最初に起立して各自音読する。読み終わったものから着席する。
2. 自分が音読できなかった語を挙手して授業者に確認する。
3. 授業者の後について音読する。
4. CDと一緒に音読する。
5. Q&Aで内容を理解する。
6. 各自で音読する。
7. グループで語彙ワークシートに取り組む。
8. クラス全体でワークシートの答え合わせをする。授業者について語彙を音読する。
9. ペアになり、一人が定義を読み、一人が語彙をワークシートを見ないで答える。
10. 役割を交代して語彙を覚える。
11. 各自で語彙を音読し、発音等を確認する。

授業内では Q&A が授業の山場となる。取り上げたいトピックを中心に授業を進める準備が授業の成否を分ける。

3.2.2 質問作成の際の注意点

1. Q&A をたどっていけば本文の内容が理解できるような質問を準備する。
2. 生徒の語彙力に合わせてパラフレイズできるように語彙も準備しておく。
3. 誰もが答えられるような簡単な質問も準備しておく。
4. Which character is your favorite? And why do you like it?などのように自分の意見を述べるような問いを用意する。
5. 教科書に書かれている内容を自分に引き寄せて、想像して考えられるような問いを工夫する。

教科書で扱っている内容はあくまでも素材であって、それに対して生徒がどう考えるのか、取り上げられた素材に対してどんな知識を持っているのか、また、書かれている内容に対して想像力を働かせているのか、を問う質問を常に投げかけられる用意をすることが大切である。

3.2.3 語彙指導

各セクションを終了した後に、英語で定義した語彙ワークシートを用いて語彙定着を図る。教科書の英語が平易であるため、学習語彙を増やすために英語での定義を用いている。概念等の語彙の定義は日本語のほうがわかりやすいため日本語を使用している。以下は *MY Way I* 9課のセクション3のワークシートの一部である。生徒のワークシートには左のコラムに単語は入っていない。

9 Sesame Street ③	
1 positive	showing clear evidence that a particular substance or medical condition is present
2 productive	producing or achieving a lot
3 experience	knowledge or skill that you gain from doing a job or activity, or the process of doing this
4 adventurer	a person who enjoys exciting new experiences, especially going to unusual places
5 waterfall	a place where a stream or river falls from a high place, for example over a cliff or rock
6 neighboring	located or living near or next to a place or person

授業では以下のような手順でワークシートを扱っている。

1. 本文内容のQ&Aの後、本文を再度音読してグループで語彙を埋める。
2. その後ペアになって、definitionを読む生徒と、ワークシートを見ないで答える生徒に分かれて1分間覚える。さらに1分間、役割を交代して覚える。
3. 次の時間の最初に語彙テストを実施し定着を図る。周りの生徒と答案を交換し、採点する。

3.2.4 語彙を定着させる

生徒たちはスマートフォンや iPad、PC などに囲まれ、自分の手で文字を書くことが非常に少なくなってきた。そしてインターネットの普及で、人は自分の脳を使って考えなくなったといわれる。例えば、「国旗が一色の国はどこか」と問われると、ネット検索する。即座に、「緑一色はリビア。赤一色はフジャイラ」と分かる。しかし、その結果を覚えることはない。覚えなくてもまた検索すればよいからだ。

子どもの脳の発達を研究する学者はこの風潮を危惧する。多くの学者は、子どもが、歴代の大統領の名前を覚えたり、九九を覚えたりすることが脳の発達には不可欠であるという。そういった丸暗記の脳の素地があって初めて思考力が育つという。Rubin Battino もオハイオ州立ライト大学の *Provocative Opinion* の “*On the Importance of Rote Learning*” に、“The most important factor influencing learning is what the learner already knows.” — 「学びに大きな影響を及ぼすのは、すでに学んでいることである」と述べている。

「丸暗記」というとよくないイメージがあるが、語彙はしっかりと、目で見た単語を音読しながら手を使って書いて脳をフル回転させて覚えさせたい。

3.2.5 Supplementary Material の活用

生徒の興味を引く素材を扱った課では、動画などを利用して、素材に対する別の視点を与えたり、素材に対する深い理解を得られるように活用することが考えられる。

“○○ for Kids”というサイトは多くの素材を扱っており、使われている語彙も「生徒の語彙力+α」で上位学習者には刺激になる。“The Olympic Games for Kids”や “Kanakuri Shizo”など活用できるサイトは多くある。ここでは‘Sesame Street’の軌跡をまとめた5分ほどのNBC News SUNDAY TODAY: “‘Sesame Street’ Turns 50: How It’s Impacted The World”の動画 (<https://youtu.be/-nuRlY3QWgo>) を扱った授業を紹介する。

動画は2回視聴させる。1回目は「早すぎてわからない」と生徒はざわつき、文句をいう。そのあと、語彙や着目すべき箇所等を解説した後の、2回目の視聴では、打って変わったように静かに集中して視聴し、一気に理解が深まっているのがよく分かった。「わからない」とこぼす生徒に辛抱強く threshold を準備し、+1の授業を試みるのも生徒の意欲を喚起する手段となる。

また、教科書を使った授業の進め方も、1課から順次進めていくというのではなく、生徒の興味のあるもの、教えたものをピックアップして課の順序にとらわれない授業の計画を立てるのも一考である。

以下が使用した語彙リスト（一部）である。

Sesame Street YouTube		
1	PBS	Public Broadcastin Service; 全米ネットの公共放送網： NHK教育番組チャンネルのようなもの
2	tackle	to try to deal with a difficult problem
3	premiere	初公開する
4	preschoolers	未就学児
5	get divorced	離婚する
6	be confused	混乱する
7	homelessness	ホームレスであること

4. まとめ

William Arthur Wardのいう “The mediocre teacher tells. The good teacher explains. The superior teacher demonstrates. The great teacher inspires.”の言葉通り、教えるということは生徒に自ら学ぶ意欲を起こさせるということに尽きる。特に日本で英語を教えるということは、日本語以外の言語を目や耳にする機会がほとんどないということで、英語力を伸ばすには、学校以外でどれくらい学習者が自ら進んで英語を学習するかにかかっているということだ。しかし、生徒一人一人のやる気は異なる。そのため、生徒のやる気を引き出すには、教師がどれくらい多くの引き出しを持っているがカギとなる。

アメリカ国務省の付属機関である FSI (Foreign Service Institute) が「英語を母国語とする人が他の言語を習得するのに必要な時間」を表した。それによると、フランス語 600 時間、ドイツ語 750 時間、スワヒリ語 900 時間、ギリシャ語 1,100 時間、日本語 2,200 時間が必要としている。これから逆算し、日本人が英語を習得するのに必要な時間は 2,200 時間と言われている。中学・高校の英語の授業で学ぶのは約 1,200 時間。あとの 1,000 時間をどうするか。どう生徒の意欲を喚起し、「英語はおもしろい」と思ってもらえるか。我々授業者の肩にかかっている。日々研鑽を重ねたい。

最後に、このような実践を行い、まとめることができたのは、授業に積極的に参加してくれた生徒のお陰である。彼女たちの意欲的な授業への取り組みがなければ私の授業は成り立たなかった。また、そういった生徒を育てるべく日々情熱をもって授業に取り組んでおられる勤務校の先生方の努力失くしても私の実践は成り立たなかった。勤務校の生徒と先生方にここに深く感謝申し上げたい。

参考文献

- Battino, Rubin. (2020). *On the Importance of Rote Learning: Provocative Opinion*, Wright State University, Dayton, Ohio.
(<https://pubs.acs.org/doi/pdf/10.1021/ed069p135>)
- Nation, Paul. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*: Heinle Cengage Learning.
- 和泉伸一. (2009). 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』. 大修館書店.
- 和泉伸一・池田真・渡部良典. (2012). 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第2巻 実践と応用』. Sophia University Press 上智大学出版.
- 上野創、貞国聖子、三島あずさ、山下知子. 「考えの過程、問われる説明力 全国学力調査・結果と分析」.朝日新聞. 2019-08-01, 朝刊, 22面.
- 上智大学 CLT プロジェクト. (2014). 『コミュニケーション型英語教育を考える』. アルク選書